安新町探索ウォーキング　和田地区社会福祉協議会

家数・人数　家数 19（本百姓 16 ・水呑 3）ほかに商家 1・医者 1【元文元年(1736)安間家文書】

Ⅰ　普伝院

普伝院はもと長泉庵と称し，無宗旨の寺であった。慶長元年(1596)上飯田の稲荷山竜泉寺　徳翁秀養和尚を開山に招請し，松竜山普伝院と改称した。

○常 夜 燈 建 立……　当所　久右エ門（明善の父　ほか 28 名）

○のぼり立て建立……　大正 9 年 1 月(1920) 金原明善

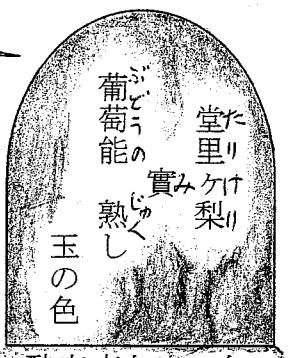
（1）道標と句碑

道標や句碑を見つけましょう

奥山半僧坊道道標
（説明後述）

炎天の
百歩に慣れし
千歩かな
普伝廿五世
淳　応

生命ある
限りを色に
花古木
内室いし子



酔春亭左光の句
（説明後述）
「葡萄の実
熟したりけり　玉の色」
と読む

虚子の息子
の句

（2）半僧坊道の道標

この道標は，普伝院の参道が旧東海道までのびていたころ，参道の入口にあった。現在は普伝院境内に移されている。半僧坊信仰は江戸期からあったが，急速に盛んになったのは明治に入ってからである。遠江　三河　さらには尾張からも奥山半僧坊を目指し，参詣者が絶えることがなかった。半僧坊を参詣する人々のために各所に道しるべが建てられた。

（3）酔春亭左光の句碑

左光は内藤彦端といい貴平村に生まれた。若くから俳諧を読み，酔春亭左光と号した。左光に教えを受ける者は近村ばかりではなく浜松宿の名もみえる。文化年間には酔春亭連として盛んであった。「葡萄の実熟したりけり珠の色」の句碑は，笠井町宝永寺の百句塚　安新町普伝院　笠井町定明寺にある。　左光（1740～1818）

（4）「安間のお稲荷さん」は，雄の狐

普伝院は，安間稲荷で知られている。安間稲荷は，竜泉寺の鎮守明神を勧請している。伏見

（京都）の稲荷で雄の狐である。ちなみに豊川稲荷は雌の狐である。

（5）石碑　「安間吒枳尼尊天」は明治の名残

昔は旧東海道から普伝院に至る参道があった。その参道の道端に「安間吒枳尼尊天」（あんまだきにそんてん）と記した石標が立っていた。現在は門前に移設してある。明治維新の際，神仏分離令が施行され神仏混淆ができなくなったが，寺院で祀る場合は，経典｛だきにてん｝のもとに存続された。豊川稲荷も，曹洞宗妙厳寺内にある。「安間吒枳尼尊天」の石標は，大正10年建立であるが，明治維新の名残であるといえよう。

（7）千　体　仏

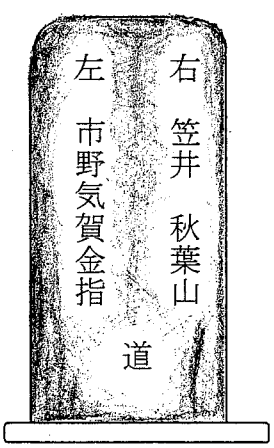
「浜松市史 二」467 頁に「安間新田普伝院の千体仏を祀るお堂では，元禄のころ一千日の念仏を行った」とある。このお堂の位置は国道一号線の北側，緑化園のすぐ北側にあった。（姫町道を北進し笠井街道への分岐点にあった）いつ普伝院境内へ移動したのか不明。小祠には，体長 15 ㎝～20 ㎝位の仏像が 800 体位安置されている。

「浜松の史跡　続編」121 頁に，千体仏についての寺伝が出ている。

「室町末期の戦国時代，天竜川西岸のこの辺りで徳川勢と武田勢との間に激しい合戦が展開されたとき，討死にした両軍の将士の霊をなぐさめるため村人たちが浄財を出して祀ったもので，当時は千体堂に安置されていたそうである。」と記されている。

Ⅱ姫街道と秋葉街道の道しるべ

姫街道



江戸時代の脇街道であった姫街道は，旧東海道安間新田町地内から始まっている。旧東海道，今切れの渡しと取調べの厳しい新居の関所を嫌った女性たちが，浜名湖北岸に迂回し本坂峠を越えた道だある。

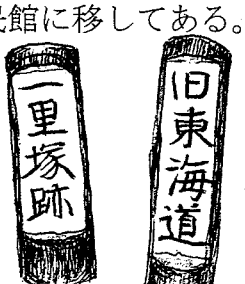
秋葉山道

秋葉山　鳳来寺に参詣するため，秋葉山＝雲名＝熊＝大平＝鳳来寺新城＝東海道御油が秋葉道の本道であった。右図の道標は姫街道　秋葉道への方角を示すものである。

建立した８人の名前が刻まれている。その中に北島村民の名前もある.

道標を建てた村人たちの温かい心遣いが伝わってくる。

嘉永元申年(1849)3 月の建立である。鳳来寺方面の道標は，天竜公民館に移してある。



Ⅲ一里塚跡

「くたびれたやつがみつける一里塚　柳樽八」と　「広辞苑」にある。

「一里（約４Km）ごとに土を盛り，多くは塚に榎(えのき)を植え，里程の目標とした。旅人の目にふれやすいように考慮されていたのである。

一里塚は戦国時代の末にも築かれていたようであるが，本格的に構築されのは慶長年間である。

慶長９年(1690)，江戸日本橋を起点とした諸街道が整備され，京に至る東海道は最も重要な道として松並木が植栽され，一里塚がつくられた。一里塚の所在を記録している良質な資料として「東海道宿村大概帳」（逓信博物館（東京））がある。それによると。安間新田の東側の一里塚は見付にあり，西側の一里塚は向宿にある。旅人たちは，東海道安間新田の一里塚を目印に，姫街道入口を見つけただろう。姫街道に入って最初の一里塚は小池（長上）にある。「東海道宿村大概帳」は，気賀関所へ凡そ四里半としている。この分岐点に，嘗ては鳳来寺道への道標があったという。探したところ天竜公民館にあった。

安間新田の一里塚界隈は，東海道の新道開発や国道一号線バイパスの開通などにより，今では道路敷きになっている。この一里塚は明治の中期には取り除かれてしまったという。

【静岡県史跡名勝天然記念物調査告書　第三集】大正５年調査に「遠江国一里塚」と記されている。安間新田の塚は本坂通（通称姫街道）の一里塚も兼ね，ここを起点に分岐している。

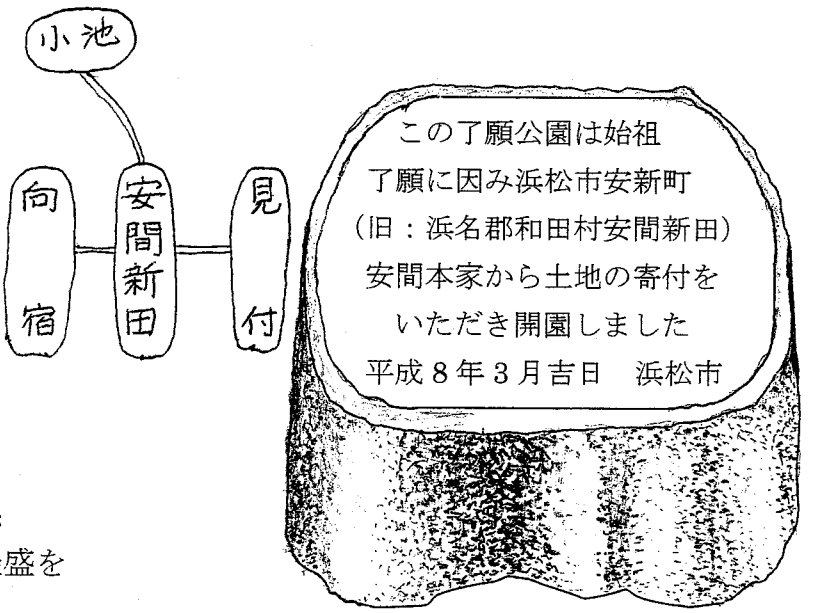
東海道一里塚　　日本橋より六四里

㊐は　浜名郡和田村安間新田十一番地、宅地一畝二十三歩、　　持主　大石盛一二、三年前宅地に削平し原形なし。

㊗は　北に同じ、一畝二十一歩、　借家になり原形なし。この一里塚は東海道と姫街道の相持なり。　この塚の東五、六間の所より入る姫街道也。

Ⅳ　安間了願

南北朝時代，後醍醐天皇の南朝と足利尊氏を中心にした北朝が対立していた。そのころ了願は，今の松林寺辺りに定住し耕地を開墾した。了願は後醍醐天皇側の南朝に味方した楠　正行（楠　正成の長子）の家臣であった。正平４年(1348)，四条畷の乱で討死にした。了願が土着第一号となり，その子孫により開拓が進められ，安間郷の隆盛をみることになる。



Ⅴ　安間川公園　　水と緑が豊か…鯉がゆうゆうと泳いでいる

安間川公園は「魅力ある区づくり事業」，水と緑のコリドー（回廊）を結ぶ「核」になっている。安間川公園の周囲を，松小池川・安間川がとり囲かこんでいる。豊かな緑がある。小学生の体験的学習の場であり，中学生は部活の練習に活用しているのをよく見かける。

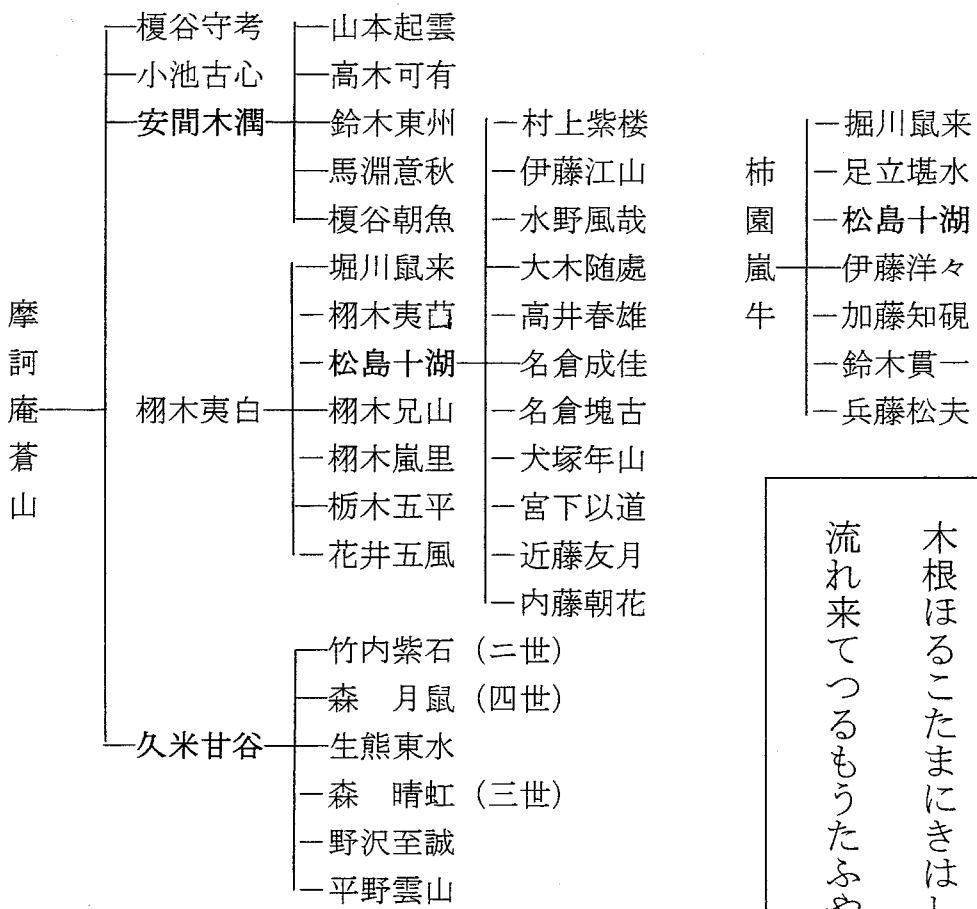
Ⅵ　遠州を代表する俳人　　安間木潤

安間木潤は文政十年(1827)　６月 25 日，遠江国長上郡天王村の竹山勝平の次男として生まれ，

弘文２年(1845)，19 歳で安間家（了願が元祖）の養子になった。名は臺（うてな），襲名して七郎佐衛門と称したが，通常　安間七郎といっていた。大正５年３月 20 日病死，享年 90 歳。神葬により「神祇安間臺大人神霊」として祭られた。生前は稲荷神社神主職を務め，富月庵木潤と号し俳諧に活躍した。当時，天竜川右岸における蒼山門下の逸足として小池古心とともに蒼山風俳諧の中心的存在であった。安政６年(1859)33 歳の 12 月黙養庵烏谷から入門の書を受けたが，烏谷没後はその遺言を守り，蒼山門下と蕉門の伝道を許されている。木潤の後継者として大須賀周夢・鈴木静山の名がある。

幕末から明治にかけての遠州の俳諧は，俳書に残る俳人の数が急激に増加している。具体的な流れとしては，摩訶庵蒼山の門流と柿園嵐牛（掛川）門下の活躍がある。木潤（安間）・十湖（豊西）甘谷（半田）が遠州を代表する俳人であった。

【幕末から明治の俳人の系譜】



木潤の句

野も山も末枯れてたたひとつ松

朝戸出のかいなき鷹の別れかな

木根ほるこたまにきはし秋の暮

流れ来てつるもうたふや春の水

俳人と句碑

○ 摩訶庵蒼山…自らを雲水と言い切る。俳人意識をもち，立身出世や世俗的な名誉は求めなかった。

○ 安間木潤…俳諧をもって身を修め，さらに一家を斎える（ととのえる）という儒教的な倫理観の持ち主で，世俗的な名誉には全く無関心であった。

○ 松島十湖…「俺は天下の俳人で，旧派の隊長，月並の棟梁だ」と自ら言い切る土俗性に徹した俳人，句碑建立を奨励するなど権威的な面をもっていた。